

I. 運営委員会報告

2005年10月8日に広島大学東千田校舎において開催した。審議事項は以下のとおり。

- ① 2004年度決算(案)について審議した。
- ② 2005年度予算(案)について審議した。
- ③ 編集委員会による植生学会誌「投稿規程」および「執筆要領」の改訂(案)を承認した。

II. 編集委員会報告

2005年10月8日に広島大学東千田校舎において開催した。審議事項は以下のとおり。

- ① 会誌への広告掲載料について審議した。
- ② 植生学会誌の原稿種別について審議し、「投稿規定」および「執筆要領」の改訂(案)を作成した。

III. 企画委員会報告

2005年10月8日に広島大学東千田校舎において開催し、講習会の開催と植生データベースの構築などについて審議した。

IV. 表彰委員会報告

2005年10月8日に広島大学東千田校舎において開催し、選定基準について審議した。

V. 2005年度総会報告

2005年10月9日に広島大学東千田校舎において2005年度総会が開催され、以下の事項が報告または承認された。

A. 報告事項**1. 事務局(庶務関係)**

2005年10月6日現在の会員数は、正会員565名、団体会員15団体である。

2. 事務局(編集関係)

- ① 植生学会誌第21巻2号(2004年12月)と同22巻1号(2005年6月)を発行した。
- ② 植生情報第9号(2005年5月)を発行した。
- ③ 植生学会誌および植生情報に、図書などの広告を掲載することとした。

B. 承認事項

1. 2004年度収支決算(別掲1)を承認した。
2. 2005年度収支予算(別掲2)を承認した。
3. 植生学会誌の「投稿規定」および「執筆要領」の改訂について、一部修正の上でこれを承認した(別掲3および4)。

C. その他

第11回大会開催地となる信州大学の島野光司氏より、多数会員の参加が要請された。開催日は2006年10月7日から9日(一般講演は8日)。

VI. 植生学会第10回大会報告

植生学会第10回大会が、2005年10月8日から10日にかけて広島大学東千田校舎において開催された(下記日程)。一般講演では口頭34題、ポスター28題の発表が行われた。参加者は

予約申込者166名、当日参加者41名の計207名であった。

10月8日: 各種委員会、運営委員会

10月9日: 一般講演(口頭発表・ポスター発表・特別セッション)、総会、懇親会

10月10日: エクスカーション(山県郡安芸太田町深入山)

一般講演は以下のとおりであった。

<口頭発表>

- A01 アフリカ南西部ナミビアのサバンナにおける樹形変化。沖津進(千葉大・園芸)
- A02 韓国鬱陵島の海岸植生。大野啓一(横国大・環境情報)・宋鍾碩(韓国・安東大)
- A03 ユーラシア大陸西部におけるステップに関する植物社会学的研究。程云湘(筑波大・生命環境科学)・川田清和(農業環境技術研究所)・中村徹(筑波大・生命環境科学)
- A04 内蒙古の草甸草原における農耕地周辺の草原にリターがない理由。川田清和(農業環境技術研究所)・中村徹(筑波大・生命環境科学)
- A05 西シベリアの森林ステップにおける草原植生。竹原明秀(岩手大・人文社会)
- A06 航空マルチスペクトルイメージングを用いたコナラ収量推定法の開発。秋田鉄也・酒井憲司・岩淵祐子・星野義延・叶旭君(東京農工大・農)
- A07 植生調査における衛星データ利活用に関する提案。上林徳久((財)リモートセンシング技術センター)
- A08 岡山県備前瀬戸地域の植生-格子間隔50m DEMと25m DEMの比較-。太田謙(岡山理科大・総情院)・波田善夫(岡山理科大・総合情報)
- A09 数値地図情報を用いた植生図作成手法-岡山県南部における事例-。森定伸・田村徹((株)ウエスコ)・波田善夫(岡山理科大・総合情報)
- A10 自然環境の階層別分類基準を取り入れた植生図の作成。松林健一(鳥取大・院)・日置佳之・長澤良太(鳥取大・農)・日置和之・原誠一・平城尚史(セントラル・コンピュータ・サービス(株))
- A11 高分解能衛星リモートセンシングデータを用いた植生図作成手法の検討-ピクセルベース分類とオブジェクトベース分類の比較-。鎌形哲稔(東京情報大・院)・李雲慶(日本スペースイメージング)・赤松幸生・森大(国際航業)・星野義延(東京農工大・農)・原慶太郎(東京情報大・環境情報)
- A12 特別セッション「植生図を植生学から考える」に先立って-あいさつ-。菊池多賀夫
- A13 環境省植生図と二次林の凡例体系。波田善夫(岡山理科大・総合情報)
- A14 リモートセンシングによる植生構造の解析-植生図化における現状と課題-。原慶太郎(東京情報大・環境情報)
- A15 二次林の植生凡例。星野義延(東京農工大・農)
- A16 植生単位の抽出と植生図化。豊原源太郎(広島大・院理)

別掲1. 植生学会 2004 年度収支決算

(単位: 円)

収入の部		予 算	決 算	差 異	備 考
前期繰り越し		4,021,960	4,021,960	0	
会費		3,356,000	2,830,000	526,000	
雑収入	バックナンバーなど	300,000	262,010	37,990	
	利息	500	19	481	
計		7,678,460	7,113,989	564,471	
支出の部		予 算	決 算	差 異	備 考
植生学会誌刊行費	850,000 円×2 回	1,700,000	1,637,587*	62,413	*第21巻印刷費および送料
植生情報刊行費	300,000 円×1 回	300,000	472,150*	-172,150	*第8号
送料		250,000	210,240	39,760	
学会事務局経費		500,000	482,831*	17,169	*会員名簿作成費を含む
編集事務局経費		150,000	115,491	34,509	
植生情報編集費		40,000	37,585	2,415	
企画委員会経費		300,000	173,320*	126,680	*文献データベース構築費
大会補助費		250,000	250,000*	0	*第9回大会分
予備費		4,188,460	30,250	4,158,210	
計		7,678,460	3,409,454	4,269,006	
収支差額(繰り越し)		0	3,704,535	-3,704,535	

別掲2. 植生学会 2005 年度収支予算

(単位: 円)

収入の部		2005 年度	2004 年度	差 異	備 考
前期繰り越し		3,704,535	4,021,960	-317,425	
会費		3,392,000*	3,356,000	36,000	*一般479名, 学生92名, 団体15名
雑収入	バックナンバーなど	300,000	300,000	0	
	利息	500	500	0	
計		7,397,035	7,678,460	-281,425	
支出の部		2005 年度	2004 年度	差 異	備 考
植生学会誌刊行費	850,000 円×2 回	1,700,000	1,700,000	0	
植生情報刊行費	400,000 円×1 回	400,000*	300,000	100,000	*第9号
送料		250,000	250,000	0	
学会事務局経費		500,000	500,000	0	
編集事務局経費		150,000	150,000	0	
植生情報編集費		40,000	40,000	0	
企画委員会経費		300,000	300,000	0	
大会補助費		250,000*	250,000	0	*第10回大会分
予備費		3,807,035	4,188,460	-381,425	
計		7,397,035	7,678,460	-281,425	

別掲 3. 植生学会誌投稿規定改訂条項

旧 (下線は削除)	新 (下線は改訂箇所)
— <前略> —	— <前略> —
2. 原稿の種別は、 <u>原著論文</u> 、 <u>総説</u> 、 <u>短報</u> 、 <u>資料</u> とする。	2. 原稿の種別は、 <u>原著論文</u> 、 <u>短報</u> 、 <u>総説</u> 、 <u>解説・意見</u> 、 <u>資料・報告</u> 、 <u>その他</u> (書評、学会記事など)とする。このうち、 <u>解説・意見</u> 、 <u>資料・報告</u> 、および <u>その他の一部</u> については、 <u>原則として植生情報に掲載する</u> 。ただし、 <u>編集委員会が植生学会誌への掲載を認めたもの</u> についてはこの限りではない。
3. <u>論文原稿</u> は和文または欧文で書かれたオリジナルなものとし、別に定める執筆要領にしたがって作成したものに限る。	3. 原稿は和文または英文で書かれた未発表のものとし、別に定める執筆要領に従って作成されたものに限って受付ける。
4. 原稿の採否は編集委員会が決定する。受付られた原稿について、校閲を複数の専門家に依頼する。その結果、内容、体裁に問題があると判断された場合は、その旨を著者に伝えて修正を求める。受理できないと判断された論文は、理由を明記して著者に返送する。	4. 原稿の採否および種別は編集委員会が決定する。受けられた原稿について、校閲を複数の専門家に依頼する。その結果、内容、体裁等に問題があると判断された場合は、その旨を著者に伝えて修正を求める。受理できないと判断された原稿は、理由を明記して著者に返送する。
5. <u>投稿原稿</u> は本文、図、表のすべてを3部作成して送付しなければならない。原図、原表は原稿受理後提出する。原稿には投稿原稿送付状を添付する。	5. <u>編集委員会がその原稿の掲載を可とし</u> 、 <u>編集委員長がそれを認めた日付をもって</u> 、その原稿の受理日とする。
6. <u>著者校正は原則として初校にかぎって行い</u> 、 <u>誤植の訂正にとどめる</u> 。	6. 原稿は本文、図、表のすべてを3部(コピー可)作成して送付しなければならない。原稿には <u>必要事項を記入した最新の投稿原稿送付状を添付すること</u> 。
— <中略> —	— <中略> —
付則 1. この規定は2002年10月19日より適用する(2002年10月18日改訂)。	付則 1. この規定は2005年10月9日より適用する(2005年10月8日改訂)。
付則 2. この規定の改訂は、植生学会編集委員会の議を経て、運営委員会の承認を得て行うものとする。	付則 2. この規定の改訂は、編集委員会の議を経て、運営委員会の承認を得て行うものとする。

別掲 4. 植生学会誌執筆要領改訂条項

旧 (下線は削除)	新 (下線は改訂箇所)
1. 原著論文、 <u>総説の原稿</u> は和文または欧文とし、次の順序で記述する。	1. 原著論文、 <u>短報</u> 、 <u>総説</u> は和文または英文とし、次の順序で記述する。
A. 和文の場合: 1 表題, 2 著者名, 3 所属, 4 英文表題, 5 ローマ字著者名, 6 英文所属, 7 欄外見出し (35字以内), 8 英文アブストラクト, 9 Key words (アルファベット順に5語以内), 10 本文, 11 摘要, 12 文献。	A. 和文原稿: ①表題, ②著者名, ③所属, ④英文表題, ⑤ローマ字著者名, ⑥英文所属とアドレス, ⑦欄外見出し (30字以内), ⑧ Abstract, ⑨ Key words (アルファベット順に5語以内), ⑩本文, ⑪摘要, ⑫引用文献。
B. 欧文の場合: 1 表題, 2 著者名, 3 所属, 4 欄外見出し (約12語以内), 5 アブストラクト, 6 Key words (アルファベット順に5語以内), 7 本文, 8 英文の要約 (本文が英文の場合はなくともよい), 9 文献, 10 和文の要約 (表題, 著者名, 所属, 本文要約)。	B. 英文原稿: ①表題, ②著者名, ③所属とアドレス, ④欄外見出し (約12語以内), ⑤ Abstract, ⑥ Key words (アルファベット順に5語以内), ⑦本文, ⑧引用文献, ⑨要約 (和文の表題・著者名・所属, 和文要旨)。
2. <u>短報</u> および <u>資料</u> については、和文の場合は、英文アブストラクト、Key words、摘要はなくともよい。欧文の場合は、アブストラクト、Key words、 <u>英文の要約</u> 、 <u>和文の要約</u> はなくともよい。	2. <u>解説・意見</u> 、 <u>資料・報告</u> については、 <u>原則として上記1. に準ずるが</u> 、 <u>和文原稿</u> の場合は、 <u>Abstract</u> 、 <u>Key words</u> 、 <u>摘要</u> はなくともよい。 <u>英文原稿</u> の場合は、 <u>Abstract</u> 、 <u>Key words</u> 、 <u>要約</u> はなくともよい。
	3. 本文中で複数の文献を引用するときは、 <u>発表年の古いものから新しいものへ</u> 、 <u>また、同一発表年のときは著者のアルファベット順に並べる</u> 。同一著者で同一発表年のものについては、 <u>年号の後にアルファベットを付して区別する</u> 。また、 <u>3名以上のものについては、「…ほか」または「… et al.」とする</u> 。記述は <u>下記の例および最新号の形式に準ずる</u> 。 …が明らかにされている (木佐貫ほか 1992; 佐藤 1992; Sakio 1997; 久保ほか 2000a, b; Sakio et al. 2002)。

3. 文献は本文中に引用したものすべてを著者のアルファベット順に記すこととし、記述は下記の例および最新号の会誌の形式に準ずる。

— <中略> —

4. インターネット上に公開されている資料で論文中に引用できるものは、原則として情報の永続性が保たれている資料に限る。電子ジャーナル化された学術誌（紀要、プロシーディングなどを含む）の引用と、国、自治体、またはこれらに準ずる公的機関が管理しているデータベースの引用を認める。これら以外の資料を引用したいとの申し出が著者からあった場合には、編集委員会で個別に検討する。引用した電子ジャーナルは、引用文献リスト中に他の印刷物と同様の形式で記入する。ただし、電子ジャーナルの発行者が指定する書式がある場合は、その情報を必ず含むようにすること。データベースの引用にあたっては、本文中に管理者（発行者）、データベースの名称、アドレス、参照年月を明記すること。なお、必要があれば脚注に入れることができるが、本文末尾の引用文献リストには掲載しないこと。

本文中には下記の例のように記述すること。

高山試験地の年降水量は気象庁の電子閲覧室 (<http://www.data.kishou.go.jp>, 2003.9 参照) に掲載されている岐阜県高山のデータを代用した。

— <中略> —

5. 和文原稿は A4 版 400 字詰原稿用紙に横書きし、ワードプロセッサによるときは、A4 版厚手の白紙に 34 文字・30 行で打ち出し、1 ページとする。なお、下部余白中央にページ番号を振ること。
6. 欧文原稿は A4 版厚手の白紙にダブルスペースでタイプし、上下は各 3 cm、左右は各 2.5 cm 程度をあげ、約 65 文字、25 行を 1 ページとする。なお、下部余白中央にページ番号を振ること。
7. 本文中の見出しおよび小見出しはボールドとする。
8. 本文中の動・植物名の和名はカタカナ、学名（属名・種小名など）はイタリック体とする。
9. 上記のほか、最終原稿におけるボールド、イタリック、上つき、下つきなどの指定はすべて朱書き（手書き）でおこなうこと。
10. 原著論文は刷り上がり 12 ページまで、総説は 16 ページまで、短報および資料は 4 ページまでは無料とし、超過分は著者の負担で掲載することができる。超過ページ印刷代は 1 ページにつき 9,000 円とする。
11. 図、表、写真等の大きさは原則として自由とするが、投稿者の責任において作成し、挿入希望位置を本文原稿の余白に朱書きで指定すること。
12. 図、表、写真等のカラー印刷は所定の料金とし、著者の負担とする。
13. 図の説明は別紙にまとめて書き、その紙には本文に続くページ数を打っておくこと。
14. 表の説明は表の上部に書くものとする。
15. 1 ページにおさまらない表は、著者の負担で折り込みとすることができる。
16. 原図、写真等は原稿受理後に、編集委員会の指示に従って送付すること。その際に本文、表、図の説明等を入力したフロッピーディスク、CD、MO 等（アプリケーションの形式だけでなくテキスト形式のものも入れること）を添えること。コンピュータで作成した図やデジタル化された写真がある場合は、

4. 引用文献は本文中に引用したものすべてを著者のアルファベット順に記載し、記述は下記の例および最新号の形式に準ずる。

— <中略> —

5. 論文中に引用できるインターネット上の資料は、原則として情報の永続性が保たれているものに限る。電子ジャーナル化された学術誌の引用と、国、自治体、またはこれらに準ずる公的機関が管理しているデータベースの引用を認める。これら以外の資料を引用したいとの申し出が著者からあった場合は、編集委員会で個別に検討する。引用した電子ジャーナルは、引用文献リスト中に他の印刷物と同様の形式で記述する。電子ジャーナルの発行者が指定する書式がある場合は、その情報を必ず含むようにすること。データベースの引用にあたっては、本文中に管理者（発行者）、データベースの名称、アドレス、参照年月を明記し、引用文献のリストには記載しないこと。記述は下記の例および最新号の形式に準ずる。

高山試験地の年降水量は気象庁の電子閲覧室 (<http://www.data.kishou.go.jp>, 2003.9 参照) に掲載されているデータを代用した。

— <中略> —

6. 和文原稿は、A4 版の白紙に上下各 3 cm、左右各 2.5 cm 程度をあげ、34 文字、30 行を 1 ページとする。なお、下部余白中央にページ番号を振ること。
7. 英文原稿は、A4 版の白紙に上下各 3 cm、左右各 2.5 cm 程度をあげ、約 65 文字、25 行を 1 ページとする。なお、下部余白中央にページ番号を振ること。
8. 本文中の見出しおよび小見出しはボールドとする。
9. 本文中の動・植物名の和名はカタカナ、学名（属名・種小名など）はイタリック体とする。
10. 最終原稿におけるボールド、イタリック、上つきなどの各種指定はすべて朱書きで行うこと。
11. 原著論文は刷り上がり 12 ページまで、短報、資料・報告は 6 ページまで、総説は 16 ページまで、解説・意見は 8 ページまでを無料とし、超過分は著者の負担で掲載することができる。超過ページ代は 1 ページにつき 9,000 円とする。
12. 図、表、写真等の大きさは原則として自由とするが、投稿者の責任において作成し、挿入希望位置を本文原稿の右側余白に指定すること（最終原稿では朱書き）。
13. 図、表、写真等のカラー印刷は所定の料金とし、著者の負担とする。
14. 図の説明は別紙にまとめて書き、その紙には本文に続くページ数を打っておくこと。
15. 表の説明は表の上部に書くものとする。
16. 1 ページに収まらない表は、著者の負担で折り込みとすることができる。
17. 最終原稿および原図、写真等は、原稿受理後に編集委員会の指示に従って送付すること。その際に本文、表、図の説明等を保存したフロッピーディスク、CD、MO 等（アプリケーションの形式だけでなくテキスト形式のものも入れること）を添えること。コンピュータで作成した図やデジタル化された写真がある

これも入れること。

17. 写真は原則的にプリントした陽画とするが、ポジのスライドフィルムやデジタル化されたものがある場合は、最終原稿提出時にそれも添付すること。

18. 別刷は1論文につき50部を無料で受け取ることができる。これを超える別刷は実費を著者が負担して作成する。別刷の必要部数(無料分を含む)を50部単位で投稿原稿送付状に明記する。

付則1. この要領は2003年10月18日以降に投稿された原稿に適用する(2003年10月17日改訂)。

付則2. この要領の改訂は、植生学会編集委員会の議を経て、運営委員会の承認を得て行うものとする。

場合は、これも入れること。

18. 写真は原則的にプリントした陽画とするが、ポジのスライドフィルムやデジタル化されたものがある場合は、最終原稿提出時にそれも添付すること。

19. 著者校正は原則として初校に限って行い、誤植の訂正にとどめる。

20. 別刷は1論文につき50部を無料で受け取ることができる。これを超える別刷は実費を著者が負担して作成する。別刷の必要部数(無料分を含む)を50部単位で投稿原稿送付状に明記する。

付則1. この要領は2005年10月9日以降に投稿された原稿に適用する(2005年10月8日改訂)。

付則2. この要領の改訂は、編集委員会の議を経て、運営委員会の承認を得て行うものとする。

B01 放棄畑の二次遷移における外来植物の10年間の発生活長・池田浩明(農業環境技術研究所)

B02 福岡県四王寺山麓におけるハンノキ林の動態。須田隆一(福岡県保健環境研究所)・六田宗一郎・薛孝夫(九州大・農)

B03 都市近郊二次林における19年間の種組成の変化。大場健太郎・星野義延・松田梨香(東京農工大・農)

B04 環東海(日本海)域の植生分布と組成に関する比較研究。尹鍾学・福嶋司(東京農工大・農)・金文洪(韓国・済州大)

B05 北関東におけるモンゴリナラ林の分布と組成。須田大樹・星野義延(東京農工大・農)

B06 アカマツ林とコナラ林における下草刈り停止後の林床植生と光環境。阿部聖哉・梨本真・小林卓也・松木吏弓・竹内亨(電力中央研究所・生物環境)

B07 東京都多摩地方南西部におけるコナラ・クヌギ二次林の群落構造と管理との関係。島田和則・勝木俊雄(森林総研)・生亀正照・中涼子(八王子市)・齊藤修(大阪大・工)

B08 ハマボウ(アオイ科)の個体群多様性と地理的分布。中西弘樹(長崎大・教育)・中西こずえ(長崎大・環境科学)

B09 テリハノイバラとノイバラの生態学的特性と河川域における分布特性。石川慎吾・福岡やよい・三宅尚(高知大・理)

B10 和歌山県友ヶ島のトサムラサキの生育環境。迫田昌宏・原田昭(中外テクノス(株)関西環境技術センター)

B11 西表島における溪流辺植物群落の生態学的研究。齊藤みづほ・星野義延・吉川正人(東京農工大・農)・安田恵子(総合地球環境学研究所)・星野順子(星野フィールドサイエンス)

B12 竹林の天狗巣病による衰退と種多様性の変化。橋本佳延(兵庫県博)・服部保・小館誓治・鈴木武・石田弘明(兵庫県立大・自然・環境科学研究所)

B13 絶滅危惧種ハナガガシの世代間における遺伝的多様性の比較。棟田貴子・伊藤哲(宮崎大・農)

B14 六甲山におけるイヌブナの分布・個体群構造・結実サイズ。柄本大介(神戸大・院)・服部保・石田弘明(兵庫県立大・自然・環境科学研究所)・武田義明・福井聡(神

戸大・発達科学)

B15 久木野林木遺伝資源保存林(IBP調査区域)におけるツブラジイとスダジイおよび雑種の分布パターン。小林悟志(国情報研・学術)

B16 北信州の里山におけるノウサギの冬季の二次林選択性。島野光司(信州大・理)・井田秀行(信州大・教育)

B17 植生復元工法施工地における森林の復元過程について(予報)。桑原佳子・足立高行(応用生態技術研究所)・中西茂樹(エコユニット協会)

B18 中国青海省のチベット高原における野草放牧地での植生と土壌との関係。西脇亜也・井戸田幸子(宮崎大・農)・李国梅(鹿児島大・院)・宋仁徳・長谷川信美(宮崎大・農)・福田明(静岡大・工)・諾布文江・才仁旦周・呂玉城(玉樹州草地センター)・老賽巴(玉樹州牧場)

<ポスター発表>

P01 植生図の定量化—目視判読は地理情報システムによる解析にどこまで迫れるか—。藤原道郎・美濃伸之(兵庫県立大・自然・環境科学研究所)・吉村亨子(兵庫県立淡路景観園芸学校・プラトー研究所)・浅見佳世・田村和也・赤松弘治((株)里と水辺研究所)・服部保(兵庫県立大・自然・環境科学研究所)・武田義明(神戸大・発達科学)

P02 DEMを用いた傾斜変換線にもとづく小地形の自動分類による潜在植生図作成の試み—岩手県胆沢川支流小出川流域を事例に—。松浦俊也(筑波大・院)・鈴木和次郎(森林総研)

P03 ひとつの植生調査資料に表現された生物多様性のダイナミクス。菊池亜希良・中越信和(広島大・総合科学)

P04 関東地方東部における人工林の種組成と地理的分布。平田晶子・上條隆志・中村徹(筑波大・生命環境)

P05 関東地方における社寺林の23-34年間の種組成の変化—ヤブコウジ—スダジイ群集とシラカシ群集において—。窪山恵美・飯田尚宏・藤原一繪(横国大院・環境情報)

P06 日光戦場ヶ原の土砂堆積地における過去22年間の植生変遷。谷川敦子・吉川正人・福嶋司(東京農工大・農)

P07 岡山県南部における自然植生—森林構成樹種と林床植物相からの遷移段階の推定—。位田真弓(岡山理科大・総情院)・波田善夫(岡山理科大・総合情報)

P08 岡山県旭川下流域の河川植生の変化の傾向—1981年と

- 2004年の比較－. 藤谷佳代(岡山理科大・総情院)・亀井康弘・波田善夫(岡山理科大・総合情報)
- P09 タケノコ生産衰退期に生じた放棄竹林の拡大過程. 鈴木重雄(広島大・院)・岡貞夫(専修大・文)・中越信和(広島大・総合科学)
- P10 北海道のミズナラ林を利用した林間放牧地の遷移. 持田誠(北大・院・農)・富士田裕子(北大植物園)・秦寛(北大牧場)
- P11 火山ガス影響下における三宅島2000年噴火後4年間の植生変化. 上條隆志(筑波大・生命環境)・加藤拓(茨城県農業総合センター)・島田和則(森林総研)・清原諭高(船橋市立前原中学)・松田深雪(北大・環境)・樋口広芳(東大・農学生命)
- P12 山口県岩国市城山における照葉樹林の遷移について. 徳岡良則・黒田有寿茂・向井誠二・豊原源太郎(広島大・院・理)
- P13 大雪山におけるムセンズゲ *Carex livida* の初発見地を検討する. 加藤ゆき恵(北海道大・総合博物館)
- P14 富山県内のヒメザゼンソウが出現する群落. 山下寿之(富山県中央植物園)・和田直也(富山大・極東地域研究センター)
- P15 中部日本における亜高山性針葉樹林の組成と積雪深. 高橋克明・中村幸人・武生雅明(東京農大・地域環境科学)
- P16 日本産ニレ属3種の種子休眠と発芽特性について. 野宮治人・金指達郎・鈴木和次郎(森林総研)
- P17 日本海型ブナ林構成種の長野県下伊那地域における生育状況. 蛭間啓(飯田市美術博物館)
- P18 東海地方の耕作放棄水田跡地に再生した湿地における生育環境の多様性と木本植物の侵入定着. 肥後睦輝・澤野圭(岐阜大・地域)
- P19 絶滅危惧種ヤクタネゴヨウの更新立地類型化. 永松大(鳥取大・地域環境)・小南陽亮(静岡大・教育)・齊藤哲(森林総研)
- P20 亜熱帯砂浜海岸林における多種の共存可能性. 早坂大亮・藤原一繪(横浜国大・院・環境情報)
- P21 ヤナギバルイラソウの生態学的特性と自然生態系における繁殖の可能性. 宮本裕美子・石川慎吾・三宅尚(高知大・理)
- P22 草原生絶滅危惧植物数種の分布と実生の定着に関わる生態学的特性. 田川哲・石川慎吾・三宅尚(高知大・理)
- P23 地域フロラの希少性の類型化とその出現傾向－関東の里山地域における事例－. 根本真理・星野義延(東京農工大・農)
- P24 都市緑地内に成立する植物群落が都市域の植物相維持に果たす役割. 吉川正人(東京農工大・農)
- P25 多摩川中流域における河川敷植生の復元に及ぼす立地環境の影響. 長岡総子(国士館大)・和田美貴代(東大・理)・一澤麻子(横浜植生研究会)・阿部聖哉(電力中央研究所)・梶瀬頼子(自然環境研究センター)
- P26 土壌動物の生息状況から見た環境保全林の自然性評価について. 池田和宣((株)環境総合テクノス)・植野誠二(関西電力(株))・永井正身(環境科学(株))・朝日稔((財)兵庫県自然保護協会)
- P27 人工林伐採後の森林再生に関する種組成の評価手法の検討. 山川博美・伊藤哲(宮崎大・農)・福里和朗(宮崎県林技センター)
- P28 千野川の河道工事に伴う植生再生の評価－新旧河道における種組成の比較－. 伊藤哲・須藤陽子・中山誠・西脇亜也(宮崎大・農)